

笑顔咲く

ひまわりの里

大館市釈迦内地区の挑戦

〇 2 〇

地域ぐるみでヒマワリを栽培し、収穫した種を食用油として商品化する「釈迦内サンフラワープロジェクト」。その主役は、釈迦内小学校の児童たちだ。

総合学習などの時間を作業に充て、栽培、収穫、油の加工、販売に至るまでのあらゆる過程を体験させる。子どもたちに実践的なキャリア教育を施すのが学校側の狙い。

6月中旬の放課後。5、6年生の21人が、学校近くの市道脇の畑にヒマワリの苗を植えた。5月下旬に種をまいたが、大半が鳥の食害に遭ったため、学校で育

主 役

多様な体験、児童成長

てた苗を移植することにした。作業には地域住民や保護者ら10人も加わり、子どもたちと約1時間半にわたる汗を流した。

はこの時季。花を茎から切り取って学校に運び、地域住民の手を借りながら手作業で種を取る。搾油、瓶詰めは業者に委託するが、学校でも小型搾油機で工程を見学する。

商品の瓶にラベルを貼るのも児童たちの役目。そのラベルのデザインは、都内

が勉強になる」と話す。釈迦内小は創設当初からヒマワリと不思議な縁で結ばれている。前身は1874(明治7)年創立の「向陽学校」。創設者の日景弁吉さん(故人)が「太陽に向かって咲くヒマワリのように、明るくたくましく成長してほしい」との願いを

今年の作付面積は、昨年とほぼ同じ約2・5畝。学年別に担当の畑を決め、種まきや除草、牛ふんの堆肥まき、鳥の食害を防ぐ防鳥糸の設置などをしてきた。

ヒマワリは7月下旬に開花し、8月下旬に種の収穫期を迎える。忙しくなるの

のデザイナーから助言してもらい、児童自身が作業した。商品が店頭に並ぶ10月下旬からは、宣伝や接客も体験する。

加藤丈一朗君(6年)は「種まきや収穫の時にやりがいを感じる。畑が広がって大変だが、作業の一つ一つ

込めて命名した。プロジェクトでさまざまな体験を重ね、成長の糧にする児童たち。ヒマワリの花に健やかな成長を重ねた先人の思いが、今にしっかりと受け継がれている、とも言える。

須合朋香さん(6年)



学校近くの畑にヒマワリの苗を植える児童たち

は、プロジェクト前後の地域の変化を「活動を通じ、地域が明るくなった」と感じている。そして「ほかの学校とも協力し、県全体に活動の輪を広げたい」。地域に支えられ、地域を明るく照らす児童たちが、今度は地域の外も照らしたいと願っている。